

同 志 社 大 学

2014 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2015 年 3 月 18 日提出

| 所 属 | 職 名 | 氏 名 |
|------------------|---|------|
| 社会学部 | 教授 | 藤本昌代 |
| 研 究 題 目 | 研究者・技術者の流動性における文化構造の影響－日仏米比較－ | |
| 研 究 成 果 の 概 要 | <p>これまで本研究は日本の研究者・技術者について社会構造、文化構造に関する調査研究を行い、彼らの組織に対する意識、転職行動、評価・処遇への意識、働きがいなどを明らかにしてきた。さらに 2007 年より高流動性社会といえる米国シリコンバレーを調査し、比較検討を行った。そこには組織にこだわらないコスモポリタンな専門職像が見られたが、日本以上に地域住民、同業者、異業種関係者、プライベートなネットワークなどさまざまなつながりでセーフティネットを築き上げながら、倒産・解雇のハイリスクな社会に備える専門職たちがいた。彼らは、終身雇用が前提の日本の大企業の研究所に勤務する専門職以上にハイリスクの中、行きつけのメンタルケアのクリニックをもち、心安らぐ友人との関係をもち、またインフォーマル・ネットワークは親交の機能だけでなく、フォーマルな仕事のネットワークにも転じる自在性をもっていた。また 2011 年度から行っているフランスの調査では、組織との関係性において、長期勤続を選択する者もいれば、比較的転職回数の多い者もあり、中流動性社会という環境の中で人々は就業していた。フランスもまた政府のインターンシップ制度などの新しい政策へ徐々にコミットしながら、伝統的な社会との融合を図っていた。彼らの所属組織への愛着は最も高く、日本の経営理念の浸透を制度化した教育を行っている典型的家族主義的企業の従業員以上であった。フランスの研究者も日本の方がフランスよりも組織への忠誠心が低いデータに驚きを隠せない状況である。2014 年度は、ヨーロッパの科学技術先進国のうち、すでに 3 年の調査を行っているフランスを中心に周辺国の情報も収集しつつ、中流動性社会での外部労働市場、移民政策、産業などの社会構造、職業的序列意識、ライフコースの違い、ネットワークの発達パターンなどの文化構造の要因について、聞き取り調査を中心に情報を収集した。本調査では、フランスを中心に研究者・技術者の職業意識、職業倫理、組織との関係、組織間移動、地域移動、職業人としてのワークコースプラン、生活人としてのライフコースプランについて調査を進めている。研究者・技術者は研究成果を生み出すマシンではなく、経済的合理性だけで動く経済人だけでなく、将来への予期、価値意識、それまで歩んできた環境での規範などに影響を受ける社会的生き物として考えるべきである。彼らの行動・態度はこれらの社会的環境との相互作用によって起こり、変化するという立場から、引き続き、フランスでの事象を分析する予定である。</p> | |